

佳作

過去から伝える未来の自分への言葉

岩手県奥州市立江刺第一中学校

1年 昆野 司

未来の僕は、元気にしているだろうか。

こう思うのは、僕の体は生まれつき弱かったからだ。今では普通に生活をして、所属しているソフトテニス部で汗を流して、毎日学校に通えるようになった。しかしこれは当り前のことではない。幼く弱かった僕を父と母が守ってくれたから、今では楽しく元気に生活することができている。

僕は小さい頃、痙攣（けいれん）することが多かったそうだ。特別な病名がついているわけではないと聞いているので、体質的なものだったと思う。最後に痙攣の症状が出たのは小学校1年生の時だったのだが、それまでに症状がひどい痙攣を10回くらい起こし、病院に入院しなければならないものは3・4回ほどあったそうだ。人ごとのように言っているが、症状があったのは本当に小さい時のことで、僕に病院に行ったことや苦しかった記憶はほぼないのだ。

小学6年生の時、かつての自分の症状がどのようなものなのか、家族はどう思っていたのか知りたいと思い、自由研究で「痙攣」について調べてみた。スマートフォンをつかってさまざまなサイトを見た。多くの情報が出てきたが、痙攣は大きく分けると「間代性痙攣」と「強直性痙攣」の2種類になり、そこからさらに細かい種類に枝分かれてしていくとのことだった。

「自分がなった痙攣はどれだろう。」

痙攣で苦しかったという記憶がない僕は、家族に聞くことを思いついて、聞いてみることにした。父や母、そして祖母は症状をしっかりと覚えていてくれて、当時の様子を教えてくれた。軽い気持ちで聞いた僕はその症状に唖然としてしまった。本当に自分のことなのだろうか。僕は本当に驚き、何度も聞き返していた。

痙攣は一度起きてしまうと、体が震えること。痙攣を起こすのが当たり前のようになってしまうと、それは危険な状態であるということ。知識として知っていることと、自分の体に起きた実際の出来事として聞くものは全く別なのだったと思った。なぜかというと、母から聞かせられた僕の症状は遥かに想像を超えるものだったからだ。痙攣した僕は、白目をむき、身体は震え、時間の経過とともにどんどん青ざめていったそうだ。時には口から泡をふいてしまい、死んでしまうんじゃないかと思うこともあったという。ひどく痙攣を起こす幼い僕を救おうと、何度も病院に連れて行ってくれたのは両親だった。あまりにもひ

どい痙攣を起こし、何とか一命をとりとめた時のこと、母は泣きながら喜んだそう。

入院した時の様子は、祖母に聞いた。昼間に両親が仕事で僕のそばに居られない時は、祖母がよく連れ添ってくれたという。幼い僕は両親がいないことを寂しがり、いつも両親を待っていたという。また、祖母は注射が嫌いな幼い僕が何回もいろいろな箇所注射を打たれる姿が印象に残っていると言っていた。だが、「それを打ったらはやく治る」と祖母がいろいろ言ってくれたおかげで、泣かないで乗り越えることができた。祖母はその僕の様子を涙ぐみながら話してくれた。

自分のことだが、覚えていない自分にとっては、考えられないような経験をしていた。当時の自分の悲しさや苦しさは想像するしかできないが、もし何か言えるのであれば、今は元気だから、その苦しさはいつかなくなるから。頑張れ、そして今の僕のためにありがとう、と言ってやりたい。

僕はこの経験から親孝行、家族に恩返しをしたいと思っている。それは、何かを買ってあげたり、特別なことをしたりということではない。僕は両親や祖母より長生きをして、元気に生活を送る姿を見せることが何よりの恩返しになると思っている。

テレビやSNSを見ると悲しいニュースが溢れている。誰かを傷つけてしまう事件や、自分から命を絶つ行為。きっと僕にとって想像もできないような苦しさを味わっている人がこの世の中にはいるのだと思う。僕だってうまくいかない時、もうダメだと思ったことはたくさんある。でも、僕は6年生の時に調べた「痙攣」という体質。この経験によって両親や祖母、病院でお世話になった方々に支えられていると実感した。僕が助かったことに涙を流した母、病院に必死で連れて行ってくれた父のためにも、支えられてある「今」を精いっぱい生きて、両親よりも長生きしよう。そのように思っている。

未来の自分も、今のこの思いをいつまでも忘れずにいてほしい。